『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十二）

植木久行

●二三三番　白居易「上陽　白髪の人」「秋夜長、夜長無眠天不明。耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗雨打窓聲」

○元和四年（八〇九）、作者三八歳、都長安での作（花房・朱・王・羅）。左拾遺・翰林學士在任。前掲部分の韻字は、明と聲。上陽宮に幽閉されたまま空しく年老いた宮女が、みずからの悲慘な境遇を語る部分である。「一部唐代詩經」（陳寅恪）とも評される諷諭詩「新樂府五十首」(1)の第七首。第二一首「驪宮高し」は、一九二番に前出。なお新樂府作成の背景についても、その條參照(2)。新樂府題「上陽白髪人」を、底本は「上陽人」に作り、唐代鈔本「敦煌本」（唐詩文叢鈔）(3)も同じく「上陽人」に作る。しかしここでは、金子彦二郎校定『千載佳句』天象部・雨夜、および神田本（平安末寫本）や宋版（紹興本）『白氏文集』等に從って改めた。白居易が唱和した元稹の詩が「上陽白髪人」（「和李校書新題樂府十二首」其二）と題するためである（陳寅恪説）。しかも「白髪」の二字こそ、年老いた宮女の痛ましい境遇を暗示させる獨特の効果を持つ。單に「上陽人」だけでは、晩唐・五代頃の作品を收めた『雲謠集雜曲子』(4)中の、美女（歌妓）を詠んだ詞の一節「寶髻釵横墜鬢斜、殊容絶勝上陽家（殊容［拔群の美貌］絶だ上陽の家［上陽宮の内人］に勝る）」（「拋毬樂」［唐の教坊曲名］作者未詳）のごとく、單なる美貌の宮女を指すことにもなって、悲劇性が顯在化しないからである。

「新樂府五十首」は、作者みずから記す大序中の「唐元和四年、左拾遺白居易作」（神田本）の語によって、五十首の大半が、本年の作と考えられる。太田次男は、『諷諭詩人白樂天』(5)のなかで、『資治通鑑』巻二三七、元和二年（八〇

七）十一月の條の、「盩厔尉・集賢校理白居易作樂府及詩百餘篇、規諷時事、流聞禁中。上（憲宗李純）見而悅之、召入翰林爲學士」に着目して、「おそらく五十首が全部そろったときの年次であって、五十首がすべてこの時いっぺんに作られたとは解しがたい。一篇一篇が今でいえば一種の時事評論でもあるので、事に應じて隨時書かれ、書かれたつど數篇が流布し、そのいくつかが憲宗の目にも觸れたのであろう」と述べている。

　他方、下定雅弘『白氏文集を讀む』[6]「第一章　諷諭詩―「新樂府」五十章の成立をめぐって―」は、陳寅恪・朱金城の説を押し進めて、「新樂府五十首」は主として左拾遺・翰林學士在任中の作であるが、その完成は、母の喪に服して下邽（かけい）に退去していた「元和壬申（七年＝八一二年）冬長至日（冬至の日、十一月十日）」（唐鈔本流布の頃の、「新樂府五十首」の單行本を祖本とするらしい『白氏諷諫』本の、新樂府序の終わりに見える日付）である。しかもそれがまとまった形で世に問われたのは、『白氏長慶集』が成立した長慶四年（八二四）のことであろう、とする。

　この「新樂府五十首」の成立問題は、白詩研究の重要な課題の一つである。「新樂府三十首」の完成を示唆するらしい「君に寄す　三十章［一説に三は五の訛］」の語が見える「唐生に寄す」詩の作成は、元和四年前後に當たる「元和三〜五年間の作」と推定されている（花房・朱）。ちなみに羅聯添『年譜』は、元和四年か、やや後の作と見なすが、確定的な論據があるわけではない。ただこの「上陽白髮人」一首に關していえば、ほぼ元和四年の作、その公表も同じ年、と考えてよいだろう。

　元和四年作成の理由を説く前に、新樂府題の意味や、本詩に付された小序（題序）「愍怨曠也」（怨曠（えんこう）を愍（あわ）れむ「不憫に思う」なり）の語義を確認しておきたい。「上陽」の語は、すでに二十番に見えるが、上元二年（六七五）、高宗李治が司農卿韋機に命じて、見晴らしのよい洛水北岸の臺地上に造營させ、儀鳳四年（六七九）以後使用し始めた、東都洛陽を代表する豪奢な宮殿の名である。[7]それは皇城の西南隅の南側（皇城の南牆ぞいの東西方向）に建てられ、東都第一の名勝「天津橋」から西北方向に遠望できた。高宗・則天武后・玄宗のとき、しばしば唐朝（周を含む）の宮廷政治の中心ともなった場所である。

　ところが玄宗の天寶年間以降、天子の東都行幸が途絶えると、上陽宮は一變して、美しい宮女たちの深い悲しみに包ま

れることになる。(8) 本詩の題下原注に、「天寶五載已後、楊貴妃專寵、後宮無復進幸矣。六宮有美色者、輒潜退之別所。上陽人、是其一也。貞元中（七八五～八〇五）尚存焉」（平岡・今井校定『白氏文集』）という。天寶五載とは、楊太眞が貴妃に冊立された天寶四載八月を踏まえた表現である。陳寅恪『元白詩箋證稿』は、「天寶五載」云々の注を、元稹や白居易が唱和した李紳詩の注（李傳）であると見なすが、確證に乏しい。ただ當然、類似の史實を踏まえた作品ではあろう。

他方、靜永健『白居易「諷諭詩」の研究』(9)「第二章　白居易「新樂府」における楊貴妃像」にいう、「元稹の同題詩には、楊貴妃について一言も觸れられておらず、從って、上陽宮の白髮人が楊貴妃によって「潛配」されたという事實も無く、このことは、一人白居易によって創作された事柄に屬しているのである」と。

確かに元稹の「上陽白髮人」には、宮女の幽閉を楊貴妃の陰險な行爲と見なす詩句はない。しかし、玄宗の天寶年間、「花鳥使」によって無理やり宮中に連れてこられた美女たちを描寫して、「十中有一得更衣、(10)永配深宮作宮婢」(11)（十中に一の、更衣［天子の寵愛］を得る有るも、永く深宮に配せられて宮婢と作る）とあり、天子の訪れが途絶えた東都の上陽宮が、十分の九に及ぶ宮女たちの幽閉處となったことを歌う。ここには、楊貴妃の寵愛獨占と、寵愛を失わないために楊貴妃が陰險な手段を用いたことが、間接的ながら讀みとれよう。李紳の詩が失われた現在、元稹詩に直接言及されていないだけで、楊貴妃による宮女の幽閉を白居易の事柄と見なすことは危險である。しかも一連の新樂府は、少なくともそれなりの史實（信憑性の高い傳承・傳聞を含む）を背景にした、一種の時事評論である。そうした基盤が缺けたままでは、作成された諷諭詩も當然有效には機能しなくなる。陳寅恪以來の研究者たちが、その史實性に疑問を抱いていない點にも、十分留意すべきであろう。

○［愍怨曠也］　怨曠は、佐久注に「怨女曠夫。(12) 配偶者を得られない男女」とあり、簡野道明『白詩新釋』、堤留吉『白樂天―生活と文學―』(13)、内田泉之助『白氏文集』、朱金城・朱易安『白居易詩集導讀』(14)なども、同じ立場である。怨女・曠夫の語は、古く『孟子』梁惠王下の、昔の仁政を述べた條に、「内に怨女無く、外に曠夫無し」と見え、怨曠の語は、『詩經』邶風「雄雉」の小序に、「大夫久しく役し、男女怨曠す」などと見える。一般にいずれもその怨は怨恨・怨憤、(15) 曠は虚・空の意とされる。ところが本詩の主人公は、十

六歳の時に宮中に入り、一度も玄宗にお目にかかれないうちに楊貴妃の嫉妬と憎しみを買って上陽宮に移送・幽閉された六十歳の老女である。從ってこの「怨曠」は、一種の偏義複詞で「怨（女）」にしか意味がない。この點で高木正一『白居易上』の、「宮中の上陽宮にとじこめられた宮女の、配偶者を得られない悲しみをあわれんだ詩」という解釋が穩當である。白居易はまた、同じ「新樂府五十首」のなかの第一首「七德舞」のなかで、太宗李世民が「怨女三千（宮中の奥向きに幽閉されて、婚期を失った宮女たち三千人）放ちて宮より出さしむ」と歌っている。

　こうした「怨曠」の用例は、すでに西岡市祐「新樂府「上陽白髮人」の小序「愍怨曠」について」(16)のなかで指摘されるように、『詩經』小雅「采綠」（行役の夫の歸りを待つ妻の歌）の小序「采綠、刺怨曠也。幽王之時、多怨曠者也」に對する孔穎達の疏（『毛詩正義』巻十五）中の、「婦人之怨曠、非王政也」をあげることができよう。さらに用例を補えば、初唐の陳子昂「感遇三十八首」其二十六のなかの、「宮女に怨曠多く、層城（後宮）蛾眉（美女）を閉ざす」をあげることができる。これは、ひたすら求仙に熱中して宮女たちを顧みない周の穆王を借りて、深宮に幽閉された宮女たちの苦悶を詠んだ作品である。

　西岡論文は、詩中に「未婚の男の曠」を表現しないため、「曠」を「怨」と同義の言葉として「怨」に付加して、「宮女の拘束の踰時に起因する未婚の怨（曠）」を表す、新しい意味の言葉、と考えている。しかし陳子昂詩の用例をも考慮に入れれば、一種の偏義複詞として捉えた方がよい。この場合であっても、西岡論文に指摘されるように、「東都洛陽の上陽宮に長く拘束されて、配偶を得られなかった老嫗の怨み悲しみを表現することは、配偶を得られなかった怨みを持つ老翁の存在をも類推させる暗喩」となって效果的である。『韓非子』外儲說・右下篇に見える管仲の言葉、「宮中に怨女有れば、則ち妻無し」も思い起こさせるからである。

　元・白二人の「上陽白髮人」詩の作成背景については、すでに前掲の西岡論文が詳しく論じている。元和三年に發生した旱災の長期化と、古來旱災を起こす怨嗟の一因に數えられる「怨女・曠夫」の存在、ここでは特にそのうちの「怨女」の解放を實施して、その怨嗟を解消すること（これは同時にまた、冗費の節減でもあった）を目的として、元・白詩は作成されたのである。これは、玄宗・憲宗兩皇帝の即位時に、宮女の解放が行われておらず、元和三年に發生した旱災に對す

る政治處理が、「免租」だけにとどまっていたためでもあった。

『資治通鑑』卷二三七、元和四年三月の條に言う、「上（憲宗）、久しき旱を以て、德音（恩詔）を降さんと欲せしとき、翰林學士李絳・白居易は上言せり」と。この時の上奏內容のなかに、「宮人は驅使の餘、其の數猶ほ廣し。事は費えを省くべく、物は情（人情・道理）に徇ふを貴ぶ」という一節があり、元の胡三省は「內に怨女多きは、則ち情に徇ふに非ず」と注する。

このときの、李絳・白居易の上奏文は、いずれも現存する。李絳の「後宮の人を揀び放たんことを請ふ」[17]には、「後宮之中、人數不少、離別之苦、頗感人心、怨曠之思、有干和氣」とある[18]。他方、白居易の「後宮の內人を揀び放たんことを請ふ」[19]（「德音中の節目に加へんと奏請せる二件」の一）にも、「伏見、大曆已來四十餘歲、宮中人數稍久漸多。伏慮、驅使之餘、其數猶廣。上則虛給衣食、有供億（需要に應じて供給すること）糜費（浪費）之煩。下則離隔親族、有幽閉怨曠之苦。事宜省費、物貴徇情。……臣伏見、自太宗・玄宗已來、每遇旱災、多有揀放」云々という。二人の文中の「怨曠」も、白詩の小序中のそれと同じ偏義複詞であることは注意されてよい。

宮女解放の願いは、閏三月己酉（三日）、囚人の處罰の輕減や租稅の免除などと共に聞き屆けられている（『資治通鑑』）。こうした作成背景を考える時、白居易「上陽白髮人」は、天子に對する奏請（元和四年三月）の行爲を補う形で作成され、宮人解放の願いが聞き屆けられる同年閏三月三日以前、おそらく三月頃の作となろう。馬茂元『唐詩選』[20]も、奏請と同時の作と推定する[21]。

○「秋夜長」　いわば春の「永日」と對になる表現であり、魏の文帝曹丕「雜詩二首」其一[22]に、「漫漫として秋夜長く、烈烈として北風涼し。展轉として寐ぬる能はず、衣を披て起ちて彷徨す」とある。また南齊・王融「秋夜」詩[23]の、「秋夜長く復た長し、夜長くして樂しみ未だ央きず」は、內容（感情）的には本詩と逆方向にあるが、反復の先行例として注目される。また東晉の謝混や蘇彥に「秋夜長」と題する詩もある[24]。初唐の王勃「秋夜長」は、郭茂倩『樂府詩集』卷七六、雜曲歌辭のなかに、前揭の王融の詩などと共に收められている。この樂府題の名は、もちろん前揭の魏の文帝曹丕の詩に基づいている。

○「無眠」「眠」の字は宋版（紹興本）系の刊本では寐に作り、神田本など舊抄本系では睡に作り、既述の敦煌本も睡

である（平岡・今井校定本參照）。堀部正二『校異和漢朗詠集』によれば、十七種のテキストのうち、底本を含む三種のみが眠であり、ほかはみな睡字に作る。眠の字は、やはり「寫書の間に生じた同訓による訛傳であろう」（柳瀬喜代志「和漢朗詠集異文考」）。

ちなみに睡と寐の基本義は、やや異なる。伊藤東涯『操觚字訣』巻五には、「寢ハ、ネ所ナドヲコシラヘネルコトナリ。ソレ故ニ寢室ノ義ニモ用ユ。寐ハ、ネルコト、左傳ニ、寢不寐トアリ。ネ所シテネレトモ、ネラレヌト云フコトナリ。……睡ハ、坐寐也（『說文解字』巻四上）ト注ス。スハリテイテ、フラフラキネルコトナリ」とあり（表記の一部改める）、王力主編『王力古漢語字典』(25)もほぼ同じである。要するに、睡の基本義は坐寐《うたたね》（居眠り）、寐のそれは寢つく（睡着）、寢入るである。白詩の「夜長無■天不明」は、寢所《ベット》に臥して寢ようとしたが、なかなか寢つけないことをいう。宋版系の寐字は、前掲の曹丕詩の例や、「耿耿として（不安のために目が冴えて眠れぬさま）寐ねられず、隱憂（深い憂い）有るが如し」（『詩經』邶風「柏舟」）、「夜耿耿として寐ねられず、魂煢煢《けいけい》として曙《あけぼの》に至る」（『楚辭』「遠遊」）、「夜耿耿として寐ねられず」（曹植「洛神賦」）など、憂いや孤獨感のために夜中寢つけない時に用いられる常套表現「不（能）寐」を、明らかに意識した文字遣いである。

他方、舊抄本系の睡字は、基本義を離れた、ほぼ「寐」と同意に用いた例である。黄永武『敦煌的唐詩』(26)「敦煌所見白居易詩二十首的價值」は、「白詩屢用無睡、少用無寐。如「不睡」詩「年衰自無睡」、「獨眠吟」「夜長無睡起階前」、夜長無睡四字、與本詩正同」と述べて、敦煌本の睡字を穩當とする。資料《テキスト》としての素性の良さを考えた場合、やはり睡字を採るべきなのであろう（平岡・今井校定本參照）。寐の字は、宋代の人の、傳統的な用例を重視した、一種の合理的な校改ではなかろうか。しかし前掲の「白詩屢用無睡」という黄永武の發言は、修正を要する。那波本による平岡・今井『歌詩索引』によれば、無睡の用例は前掲の二例にとどまっている。また『全唐詩』（『補編』を含む）による北京大學中文系の李鐸博士主宰の「全唐詩電子檢索系統」においても同じ結果である。

○［天不明］　天《そら》が明るくならない。夜が明けない。「天明」は唐詩中に頻見するが、(27)「天不明」は珍しい表現である。

○［耿耿殘燈］　殘燈とは、淡い光が弱々しく明滅して、今にも消えそうな燈火《ともしび》。こうした殘字は、衰殘・凋殘・殘傷

を意味し、ある種の痛ましさ、哀れさ、暗さ等の語感をたたえる(28)。前掲の平岡・今井『歌詩索引』によれば、本例を含めて八例あり、「殘燈滅又明」（「夜雨」）、「殘燈明復滅」（「送兄弟迴雪夜」）などの用例が、殘燈の狀況を浮き彫りにする。

他方、その殘燈を修飾する重言「耿耿（こうこう）」は、次の條二三四番にも「耿耿星河欲曙天」と見え、「カスカナル姿」（『六注』）、「燈の少しく明らかなる貌」（『集註』）の方向に解釋すべきであろう。「白キ皃」（『假名注』(29)）、「トモシヒノカカヤク皃」（『永濟注』(30)）などは、明らかに不適切であり、むしろ江戸末の山田信義『翠雨軒詩話』(31)（巻三）が、陸游の詩「一燈挂西壁、耿耿靑無光」をあげて「燈火の明らかならざるを云ふ」とする説明が參考になろう。耿字はまた、白詩のなかで「紗籠耿殘燭」（「北亭獨宿」）、「晨釭耿殘燈」（「新秋曉興」）のように、單に一字だけで「耿耿」と同じく殘燈・殘燭の形容語（耿たり）となる。殘燈が「滅又明」「明復滅」などと表現されることを考えると、こうした耿耿・耿は、次條の「耿耿星河欲曙天」と共に、淡い光がちらちらとまたたき搖れるさまを指している。「燈火の消えかかりながらもほの白く光るさま」という説明（菅野譯注本）は、わかりにくい。高木正一『白居易上』が「耿耿」を「人の心に不安な感じをあたえる明かるさ」と説明するのは妥當であるが、その譯「燈（ともしび）の光りがギラギラと明かるく」には贊成できない。これとは逆に、田中克己『白樂天』の譯「ちらちらするあけがたの燈」は適切であるが、耿耿の注「光の明るく淨らかなさま」は誤っている。この耿耿については、次の條で再度詳しく検討したい。

○〔背壁影〕　背壁は、すでに二七番(32)の背燭、一四四番(33)の背壁燈の條で述べたように、中晩唐期、一般の士大夫の家庭で（華やかな妓樓などでも同じ）燈火を消さずに、ほの暗くしたまま就寝する狀況を表す新語であり、①、燈火の光を壁のほうに向けて、部屋の中をほの暗くする、もしくは②、燈火（つまり燭臺）を壁（時には帳（とばり）や屛風など）の背後に移してほの暗くする、のどちらかに解釋するのが、現在のところ最も穩當である。こうした背字は、「掩（おお）う」とも解釋されようが、いずれにしても中國の二大辭書・字典たる『漢語大詞典』6の⑭「謂燈盡或燭盡」や、『漢語大字典』三の⑳「用同〝閉(bì)〟」（閉燈は關燈に同じく、燈を消す意。「燈背欲眠時」云々の用例をあげる）の訓詁は、ともに不適切である。

他方、柿村『考證』は、背壁影を「寂しげに後影を壁にうつし」と解釋し、金子・江見『新釋』は「壁に反する側に燭をおきて、中間に身を置けば、影の壁に映るをいふ」と説明

する。近年の川口・大曽根譯注本もこの立場であるが、すでに菅野譯注本に指摘されるごとく誤りである。むしろ「壁ニソムケタル燈、カスカニシテ、ナケカハシキニ、剰へ窓ヲ打ツ雨ノ音、サヒシキト也」（『假名注』）の方向で解釋すべきであり、この場合の「影」は「人（宮女）の影」ではなく、「光をいふ」[34]（鈴木虎雄『白樂天詩解』）。白詩（「夢與李七・庾三十二同訪元九」）の「殘燈の影牆に閃き、斜月の光　牖を穿つ（殘燈影閃牆、斜月光穿牖）」の影も、下句の光と互文同義をなし、同じく光を意味する。「閃（ちらつく）」の字は、殘燈の特徴であると同時に、「耿耿」の字義を考えるうえでも參考になろう。

近藤春雄『白氏文集と國文學　新樂府・秦中吟の研究』[35]も、影を「壁に映った宮女の影」とする說に疑問を投げかけていう、「『夜長く寢ぬる無く天明けず』という句に續く『耿耿たる殘燈』以下の二句は、夜長に横になってみたものの、なかなかねむれないでいる時のことであり、とすれば影を人影とするのは無理であり、これを燈火の影（ひかり）とすれば、背壁はあたりを小暗くするため、燈火を壁の方によせたり、壁の方へ向けたり、或は壁のかげに移したりすることとする方が自然」云々と。

○［蕭蕭暗雨］　蕭蕭は、わびしい雨音の形容（擬聲語）。重言。「すさまじく寂しき皃」（『集註』）、「閑寂ノ皃」（『私注』）。「風飄飄兮雨蕭蕭」（「隋堤柳」新樂府五十首の二）、「蕭蕭暮雨人歸去」（「寒食野望吟」）などと用いられる、白詩愛用語の一つ。中唐の韋應物「王侍御に贈る」[36]詩にも、「上陽秋晚蕭蕭雨、洛水寒來夜夜聲」と見える。また「暗き雨」とは、ここでは暗い夜の雨をいう。『六注』『私注』『集註』などに「ヨルノアメ」と訓む。じつは暗雨の用例は乏しく、白詩も本例のみである。中唐の武元衡「長安の秋夜　陳京昆季（兄弟）を懷ふ」[37]詩の「螢影疏簾外、鴻聲暗雨中」は、白詩と同意の用例であろう。秋の夜長に降る、さびしい雨である。

○［異文の檢討］「蕭蕭暗雨」に對して、平岡・今井校定本は全く校記を施さない。しかし清の盧文弨「白氏文集（長慶集）校正」（同『群書拾補』所收）は、葛氏所藏の影鈔宋本に基づいて、「瀟瀟夜雨」に校改している。じつは釋信阿『私注』も、蕭蕭を瀟々に作る。特にこの異文に注目したのは、朱『箋校』が瀟瀟に作り、「各本俱訛作「蕭蕭」、據盧校改」と述べているからである。わが國の舊抄本にも、また宋版（紹興本）以下にも共通する文字「蕭蕭」を、はたして瀟瀟の訛誤といえるのであろうか。

古くは『詩經』鄭風「風雨」に「風雨瀟瀟[38]（荒れすさぶさま）」と見えるが、瀟瀟の語を頻用するようになったのは、じつは中晩唐以降の詩詞であり[39]、しかもその用法は、全く同音の蕭蕭とほぼ同義の、雨音のわびしい擬聲語としてである。たとえば劉長卿の「東西湖渺渺、離別雨瀟瀟」（「將赴湖南、湖上別…」『續拾』巻十八）、元稹の「雨瀟瀟兮鵑咽咽、傾冠倒枕燈臨滅」（「通州丁溪館夜別…」其三）、許渾の「楸梧葉暗瀟瀟雨、菱荇花香淡淡風」（「朱坡故少保杜公池亭」）などが、これに該當する。朱金城の訛誤説は、おそらく「窓を打つ聲」との關連で、雨がたたきつけて荒れすさぶ古義（暴疾・急疾）を持つ瀟瀟のほうがよりふさわしい、と判斷したのであろう。しかし平岡・今井『歌詩索引』には瀟瀟の例はなく[40]、逆に雨の音を蕭蕭と形容した用例については、すでに言及した通りである。ここは、やはり瀟瀟の文字を蕭蕭の一異文と捉えて、わざわざ本文の文字を校改すべきではなかろう。

○「打窓聲」　打は「擊つ」意（三國・魏の張揖『廣雅』釋詁三）。後漢ごろ出現し、南朝（宋・齊）以後、用例が急速に增えた。かくして打字は、いわば文言「擊」の白話的表現となる[41]。杜甫の詩（「陪鄭廣文遊何將軍…」其三）にも、「露翻兼雨打、（戎王子［草の名］）開坼漸離披」と見える。白居易は、「風霰（風に吹き付けられたアラレ）蕭蕭として窓紙を打つ」（「和自勸二首」其二）、「夜浪　船頭を打つ」（「舟中雨夜」）などと用い、友人の劉禹錫の詩にも、「迸雪　窓を打つ聲」（「酬樂天小亭寒夜有懷」）という。

ところで打の字は、敦煌本に「灑」（降り注ぐ、散落の意）に作る。前掲の盧文弨「白氏文集校正」も、葛氏の影鈔宋本に基づいて、打の字を洒（灑の異體字）に校改する。他方、平岡・今井校定本は、「敦煌本・諷諫本作灑」と注記するのみで、舊抄本や宋版等に見られる打の字をそのまま採用している。この點に關して、黃永武『敦煌的唐詩』は、「考白詩云「雨打」僅一見、卽「吳櫻桃」「可惜風吹兼雨打」。云「風霰打」者亦一見、卽「和自勸二首」「風霰蕭蕭打窓紙」。此爲「暗雨」、似宜云「灑」。白詩言「雨灑」者極多。「期宿客不至」「風飄雨灑簾帷故」、「和三月三十日四十韻」「雨師習習灑」……」という。

このうちで、「雨打」をわずか一例という指摘は、「微之の宅の殘牡丹」詩（元和五年の作）の、「殘紅零落無人賞、雨打風摧花不全」の存在によって、訂正されなければならないだろう。また白詩の愛用度は、必ずしも原形を判定する決め手にはならない。この場合、二句は「燈の影（ひかり）、雨の

聲（おと）、みな物思ひの催しなる心也」（『集註』）と評されるように、視覺と聽覺を鋭く對照させた對句であり、むしろ「打く」字のほうが音聲効果は高い。對應する「背」字が新語である點も、むしろ「撃」の白話的表現である「打」字のほうが優るように思われる。「此は暗雨爲れば、宜しく『灑ぐ』と云ふべきに似たり」とする指摘は、おそらく灑字の「散落（散・落）」の語義に着目した發言であろうが、十分な說得力を持たない。

●二三四番　白居易「長恨歌」「遲遲鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天」

○元和元年（八〇六）冬十二月、京兆府盩厔縣（陝西省周至縣）尉(42)に在任中の白居易は、當地の仙遊谷に住む王質夫・陳鴻の二人と共に仙遊寺(43)に遊び、王質夫の勸めを受けて、本詩を作る（陳鴻「長恨歌傳」）。時に作者三五歳である。玄宗李隆基と楊貴妃との愛情をめぐる長篇の感傷詩「長恨歌」は、「琵琶行」と竝ぶ不朽の名作として名高い。詩題中の「長恨」とは玄宗のそれを指し、最愛の楊貴妃を喪失したことに起因する、玄宗自身の永遠に癒しがたい悔恨・痛恨の情（松浦友久說(44)）をいう。前掲の二句は、「夕殿（夜の御殿）螢飛んで思ひ悄然（深い悲しみにくれて心細いさま）、孤燈［秋燈］挑げ盡くすも　未だ眠りを成さず［眠る能はず］」を受けて、悲しみの秋を背景に亡き楊貴妃を追慕して、一晩中眠れぬ玄宗の孤獨な姿を描寫した部分である。

○［遲遲鐘漏］　眠れぬままに夜を過ごす玄宗の耳に、時報（鐘鼓）の音が、なかなか聞こえてこないことを指す。秋は日ごとに夜が長くなるが、ここはそうした事實性よりも、夜を明かしかねる玄宗にとって、時刻の推移に従って鳴らされる鐘鼓の音の間隔が、じれったいほどに長々しく、のろのろしているように感じられることをいう。この意味で「遲遲は夜ながをかこつ玄宗に、時間の流れがのろのろとしていると感じられるための主觀的表現」（佐藤保(45)）とする指摘は妥當である。

當時、宮中では、祕書省太史局（時には獨立した司天臺(46)）内の漏刻で時刻を測定した。一夜（夜漏）を五更に分け、さらに一更を五點に分けた。そして一更ごとに鼓樓で太鼓（いわゆる漏鼓）を、一點ごとに鐘樓で鐘（漏鐘）を撃って時刻を知らせたのである（『舊唐書』巻四三）。従って一晩のうちに太鼓は五回、鐘は二十五回鳴ることになろう。これを撃つ係りの「典鐘」「典鼓」がそれぞれ二八〇人、一六〇人もいたという。もちろん當時は、季節の歩みによって晝夜の時間が

伸縮する不定時法である。一日百刻のうち、夜の時間（夜漏）は、冬至が六十刻、夏至が四十刻、春分・秋分は共に五十刻。そうして秋分以後、九日ごとに一刻ずつ夜の時間を增やし、春分以後、逆に一刻ずつ晝の時間を增やした（『大唐六典』巻十一）。事態の進行が遅いことを表す重言「遲遲」は、ここでは一更中の點と次の點との間隔が、眠れぬ玄宗にとって、途方もなく長く感じられる、という主觀的な表現なのである。

　ところで「鐘漏」は、二十五回も鳴らされる漏鐘だけでなく、更ごとに撃たれる漏鼓をも含めた表現であろう。宋版（紹興本）には「鐘鼓」に作っている。この點に關して、平岡・今井校定本には、「漏、各本作鼓。慶長本同。今從金澤本・要文抄本・管見抄本・英華本。歌行本同」と指摘する。金子彦二郎校訂『千載佳句』四時部・秋夜の條も、同じく鐘漏に作る。花房英樹『白氏文集の批判的研究』一四五頁には、「遲遲」の語や、禁中の夜を詠ずる、「和錢員外禁中夙興見示」の「窅窅鐘漏盡」などの少なくない用例が、「鐘漏」のみをいう點から考えれば、（漏の字が）優れている」と評する。また近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』四六頁にも、前掲の用例のほかに、白詩の「浴殿の西頭　鐘漏深し」（「八月十五日夜、禁中獨直…」）や、「遲遲として禁漏（禁中の漏刻）盡く」（「禁中曉臥、…」）の用例をあげて、漏字のほうがよい、と見なす。特に近藤の指摘する最後の用例は、鐘漏の方に有利である。白詩には、さらに「逸老」詩の「鐘漏行將曉」の用例もあるが、時報に關係する鐘鼓もまた、本例を除いて、三例ある。その一つ、長慶元年（八二一）、中書舍人在任時の作「西掖（中書省）の早秋　夜に（宿）直して意を書す」には、「炎涼遞時節、鐘鼓交昏曉」という。宋版・那波本などが鐘鼓に作るのは、すでに述べた「五更の時報制度」を考えての、ある種の合理的な校訂ではなかろうか。

　○［初長夜］　この三字は、初字の解釋をめぐって、二説に分かれる。①初は下句の「欲曙天」の欲と對をなし、初は一般的に已然（たった今……したばかり）、欲は即將（今にもある事態に近づきつつあるが、まだそうなってはいない［未然］）ことを表す（共に時間副詞）。白詩「月落欲明前、馬嘶初別後」（「曉別」）、「五聲宮漏初鳴夜、一點窗燈欲滅時」（「禁中夜作書與元九」）など、こうした欲と初の對は、白詩に多い句法である。ここも同じ用例と捉えて、「折しも長くなり始めたばかりの、初秋の夜」と考えるのである。もう一例、白詩中に見える「況是初長夜、東城砧杵多」は、その詩題「酬夢得早秋夜對月見寄」によって、早秋七月の例である。しかもこの

説は、下句の星河を「七月七日七夕の夜、鵲が羽根をひろげて天の川に橋を渡し、それによって牽牛・織女の星が一年に一度の逢瀬を楽しむという話を頭において考えるべきであろう」とする、堤留吉『白樂天―生活と文學―』（八六頁）の指摘とも符合する。[47] この①説によれば、秋の夜長を迎えたばかりというのに、時間の歩みがじれったいほどに遅く、次の時報（鐘鼓）の音がなかなか鳴り響かないことをいうことになる。吉川幸次郎の評釋[48]「それ（鐘鼓）は眠られぬ玄宗を、あざけるごとく、ぽつぽつと、鳴る。秋の夜は長いというこ とは、玄宗にとっては、不眠の時間が長いことを意味するが、それがこれから長くなろうとする、はつ秋の夜に」は、この典型的解釋である。

ただし「初長夜」は、いつも早秋七月を指すとは限らない。たとえば、一八六番（前出）の元稹「夜坐」詩の「螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長」は夏の終わり（晩夏六月）の描寫であり、韓偓「離家」詩の「八月初長夜、千山第一程」は仲秋八月のことである。

他方、②初を同じ時間副詞ながら、「これまでそうしたこと（事態）がなく、ここで初めて（最初・第一回）」の意味（行爲や事態の最初の出現）と考える。わが室町時代の清原宣賢の講述？には、こういう、「初ト云タカ面白ソ。作者ノ手柄ソ。前ニハ、春宵苦短―ト云タ。貴妃ニソイ玉イタ時ハ、夜ノ短キコトヲ恨ミ思召テ、日高マテ、御寝ナリテ、天下ノ朝政の廢ルヲモ、何トモ思召サズシテ、短夜ヲ御ナゲキアリシガ、貴妃ニ御別アッテヨリ、初テ春ノ夜ノ短ヲモ、事ノ外イト長イト思召ス也」と。[49]

本條は悲秋を背景に愛妃を喪失した玄宗の傷心を描く場面であるから、終わりの「春ノ夜ノ」云々の部分は單純な誤りである。しかし注意すべきことは、この部分が「長恨歌」前段に見える、楊貴妃を獲得して溺愛する玄宗の歡喜の場面「春宵（春の夜）短きに苦しみ　日高くして起き、此れ從り君王早朝せず」と遠く照應するのだ、とする指摘である。この見方は、『假名注』の「楊貴妃ト共ニ、同床ノカタライ有リシ夜ハ、秋ノ夜ノ長シトモ、思ヒ玉ハサリシカ、獨リヌル夜ヲ、明シカネ玉ヘハ、初テ長キ夜ト云也」の解釋とも通じ合う（『六注』『集註』もほぼ同じ）。

近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』も、「春宵苦短」との呼應關係に注目し、「愁のため、夜が初めて長く感じられることをいう。『古詩十九首』（其十七）に『愁多くして夜の長きを知る』とある」云々と注する。田口暢穗・松浦友久『中

國の名詩鑑賞6　中唐』[50]が、「秋の夜長を、いまさらのように感じる」と注し、一句を「遲遲たる時の鐘の音に、あらためて秋の夜長を知らされ」と譯すのも、この立場である。中西清・大木春基『高校グリップ　漢文』[51]の譯「かつては春の夜の短さをなげいたのに、今は時を告げる鐘や太鼓はなかなか鳴らず、生まれて初めて味わう夜の長さである」は、②説の典型的な解釋といってよい。

ところでこの二句前後は、悲秋を背景に夜を明かしかねる孤獨な玄宗の姿を描いている。語法的には、①②の兩説とも成立しよう。①は、初字の一般的な用法であり、本詩の「楊家有女初長成」と同義である。また②は「長恨歌」の前段と後段間の綿密な構成に着目した解釋である。②の用法は、一般に「初置張掖・酒泉郡」（『史記』平準書）のように、「初＋動詞」になることが多いが、許渾「秋夕有懷」詩の「書回秋欲盡、酒醒夜初長」の用例もある。これなどは、醉いが醒めたために、秋の夜長をいまさらながら痛感することをいう。ここでは、強いて一方に確定せず、兩説①②を竝記して今後の検討にゆだねたい。

○[耿耿星河…]　ちらちらとはかなげにまたたく天の川の描寫[52]。「耿耿」は前條の「耿耿たる殘燈」の條項で言及したように、淡く弱い光がちらちらとまたたき搖れるさまを表す重言。本條は、すでに柿村『考證』等に指摘されるように、南齊・謝朓詩の「秋河（秋の天の川）曙に耿耿たり」（「暫使下都、夜發新林…」詩、『文選』巻二六）を踏まえた表現である。この名句は、以後、梁の庾丹「耿耿横天漢」（「秋閨有望」詩）、陳の張正見「耿耿長河曙」（「秋河曙耿耿」詩）、陳の後主叔寶「耿耿曙河天」（「有所思三首」其三）、中唐の顧況「夜靜星河出、耿耿辰與參」（「遊子吟」）、權德輿「星河漸耿耿」（「秋疾初愈…」詩）などと繰り返し歌われてきた。白詩の本例も、この中の一つに數えてよい。ただ耿耿の意味に關しては、謝朓詩に對する李善注がきわめてあいまいな「光也」であり、それに續く五臣（呂延濟）注も「明淨也」であったため、十全な理解になかなか到達できなかった。たとえば『假名注』などは、「耿耿ハ、白キ義」という。

こうした狀況下、王云路『漢魏六朝詩歌語言論稿』[53]は、前掲の謝朓・庾丹・張正見・陳の後主の用例のほか、梁の劉孝綽「太子洑落日望水」詩の「耿耿流長脈」、朱异「還東田宅贈朋離」詩の「耿耿樵路分」、庾肩吾「侍宴餞張孝總應令」詩の「耿耿晴煙上」の用例をあげて、耿耿が「飄搖、閃爍貌（ひらひらと搖れ動き、ちらちらときらめく[ちらつく]さま）」を

形容することが多い點に着目し、耿耿の基本義を「閃亮而又飄搖不定」（きらめきながらも、しきりにゆれ動くさま）と指摘した。さらに語義を補足すれば、その光はいずれもほのかで弱々しい場合が多く、決してギラギラ輝く性質のものではない。本例も、今にも白みだそうとする夜明け前の天空に、天の川の星々が淡くはかなげに、ちらちらとまたたき搖れる光景の描寫である。従って「天の川の輝きもひときわさえとおる」（川口譯注本）、「ぎらぎらとかがやく天の川」（吉川幸次郎）などの譯は、いずれも不適切であろう。この點は、「ここでは、白く輝くさま」（菅野譯注本）でも同じである。この意味でむしろ簡野道明『白詩新釋』が、耿耿を「少しくきらめく貌、小明なり」と注し、「天河の星影の「チラチラ」と明かなる曙の天」云々と譯するほうがよい。

ちなみに、星に詳しい福島久雄『孔子の見た星空―古典詩文の星を讀む―』(54)はいう、本例は「謝朓詩を踏まえて、「輝く銀河」とよむべきであろう。果して銀河は曉天に冴えるか。若いときの記憶を辿ると、星の觀測をして時に明け方近くになることがある。夜がまさに極まってそろそろ東の空が白むかとみえる直前、ほんの僅かの間であるが、急に星空が一段と白っぽく、冴えわたるように感ずるのを經驗する。もちろん非常に惠まれた晴夜がそのまま曉天に續く安定した天候の場合である。このような感じが中國の詩人たちのそれと共通のものかは知る由もないが、」云々と。この福島説も、李善注に災いされた一例であろう。天文學上の眞實はしばらく置き、謝朓詩以下の、光に關する耿耿の用例は、いずれも「一段と白っぽく、冴えわたる」意味にはならない。このことは、白詩「獨眠吟二首」其一に見える、類似の表現「夜長くして睡ること無く階前に起つ、寥落たる（星がまばらで寂しいさまを形容する。雙聲）星河　曙けんと欲する天」によっても傍證されよう。ちなみに「曙」は、夜のまだ明けやらぬ「曉」よりも、朝に近い時間帶である。

吉川幸次郎の評釋には、玄宗は「ねむられぬままに、のきばに出て、そらをあおげば」云々と、背景を説明する。もちろん、「玄宗が天の河を實際に見なくともよい」（入矢義高）(55)。しかし「古詩十九首」其十七（『文選』巻二九）に、「愁多知夜長、仰觀衆星列」（ただし初冬）とあり、魏の文帝曹丕「雜詩」其一にも、寢つけぬまま外に出て天空を仰ぎ見る場面があって、その評釋はきわめて自然である。中西・大木『高校グリップ　漢文』も、こう譯する、「眠れぬままに起き出て空を仰げば、天の川は（牽牛・織女の思いをこめて）ようやく

光は薄れ、夜はほのぼのと明けそめてくる」と。

注

（1）拙稿「『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（七）」（『中國詩文論叢』第十三集、一九九四年）參照。

（2）高木達・植木久行「卞孝萱「李紳年譜」補訂（中）」（『中國古典研究』第三九號、一九九四年）も參照。

（3）「唐詩文叢鈔」の假題は、徐俊纂輯『敦煌詩集殘卷輯考』（中華書局、二〇〇〇年）による。唐代の白詩鈔本、いわゆる敦煌本（ペリオ二四九二）は、從來適切な書名を缺く。殘卷冒頭の二篇が、白居易と元稹の唱和詩であるところから、太田次男は、舊名『白香山詩集』（王重民命名）を『敦煌本元白詩抄』に改めた（太田次男『舊抄本を中心とする　白氏文集本文の研究』中卷、勉誠社、一九九七年參照）。しかしこの殘卷の終わりに直接連なる寫本がロシアに所藏されていた。徐俊の解説によれば、この後續の部分には、中唐の女流詩人李季蘭の詩や白居易の「嘆（放）旅雁」「紅線毯」（新樂府五十首の一）、さらに岑參の「招北客詞（文）」の作品が收められている。つまり敦煌本は、多くの人の作品を收めた「詩文叢鈔」、一種のアンソロジーなのである。かくして敦煌本の性格に對して下された從來の研究は、今日、再檢討を迫られている。

（4）曾昭岷ほか編『全唐五代詩』（中華書局、一九九九年）正編卷四所收。雲の字は本來「云」に作る。

（5）集英社、一九八三年。

（6）勉誠社、一九九八年。

（7）『唐會要』卷三十、洛陽宮の條參照。

（8）より詳しくは、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）「上陽宮」の條參照。

（9）勉誠出版、二〇〇〇年。

（10）冀勤點校『元稹集』卷二四には「醉」に作るが、南宋中期刻本『新刊元微之文集』卷六に從う。なお冀勤の校記も參照。

（11）蘇仲翔選注『元稹詩選』（中流出版社、一九七四年）は、この二句に對して、「更衣、指被皇帝召幸而言。言入宮之後、得幸者十之一耳。其餘則永配深宮」と説明する。

（12）明治書院、一九五三年訂正版。

（13）敬文社、一九五九年。

（14）巴蜀書社、一九八八年。

（15）じつは本來、こうした「怨」は、「蘊（積む、蓄える）」の通假で、棄てて用いない意を原義とするようである。蔣禮鴻『義府續貂（增訂本）』（中華書局、一九八三年）怨の條參照。

（16）『國學院雜誌』第八二卷第十二號、一九八一年。

（17）唐の蔣偕編『李相國論事集』卷四所收。

（18）『新唐書』卷一五二、李絳傳には、「去官無益於治者、則材能出、斥宮女之希御（天子の寵愛のまれな）者、則怨曠消」とある。

(19) 朱『箋校』巻五八所收。
(20) 上海古籍出版社、一九九九年。
(21) 陳寅恪『元白詩箋證稿』にもいう、「其事（上奏）既與樂天作詩之時相同、自必有關於白公此篇及七德舞一篇無疑也」と。
(22) 『文選』巻二九所收。
(23) 『玉臺新詠』巻十所收。
(24) 『藝文類聚』巻三、歳時上、秋所收。
(25) 中華書局、二〇〇〇年。
(26) 洪範書店、一九八七年。
(27) 『和漢朗詠集』のなかには、殘燭に作るテキストもあるが、これは類義語の書き換えにすぎない。堀部正二『校異和漢朗詠集』參照。
(28) 小島憲之『漢語逍遙』（岩波書店、一九九八年）第二部參照。また拙稿「『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（六）」（『中國詩文論叢』第十二集、一九九三年）に收める一七五番も參照。
(29) 伊藤正義ほか編『和漢朗詠集古注釋集成』第二巻下（大學堂書店、一九九四年）所收。
(30) 伊藤正義ほか編『和漢朗詠集古注釋集成』第三巻（大學堂書店、一九八九年）所收。
(31) 波多野太郎編『白話虚詞研究資料叢刊』（龍溪書舍、一九八〇年）所收。
(32) 拙稿「『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（一）」（『中國詩文論叢』第七集、一九八八年）所收。
(33) 拙稿「『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（三）」（『中國詩文論叢』第九集、一九九〇年）所收。
(34) 霍松林『白居易詩選譯』（百花文藝出版社、一九八六年再版）は、一句を「昏沈沈的殘燈映射牆壁」と譯す。背の意味が曖昧であるが、影を光の意味に捉えていることは、映射の語によって明らかである。また杜甫「大雲寺贊公房」詩其三に見える「燈影照無睡、心清聞妙香」の影も、光の意味である。
(35) 明治書院、一九九〇年。
(36) 陶敏・王友勝『韋應物集校注』（上海古籍出版社、一九九八年）巻二には、「廣德中在洛陽丞或大曆中河南府兵曹參軍任上作」という。
(37) 隋の虞世基「秋日贈王中舍」詩の「雙崤飛暗雨、八水凍寒流」は早期の用例。
(38) 「毛傳」に「暴疾也」とあり、孔疏に「雨下急疾」とある。ただし朱熹は「風雨之聲」とする。
(39) 盛唐の高適「東征賦」に「楚歌悲兮雨瀟瀟」に作るが、この瀟瀟は蕭蕭にも作る（劉開揚『高適詩集編年箋註』參照）。
(40) ただし朱『箋校』外集巻中に收める「長相思」其一には、「巫山高、巫山低、暮雨瀟瀟郎不歸」とある。しかしこの作は、呉二娘の作とする説が有力である。注（4）の『全唐五

代詩』正編巻一や、陳尙君『全唐詩續拾』（『補編』所收）巻二八、吳二娘の條など參照。

(41) 張永言・汪維輝「關于漢語詞彙史研究的一點思考」（張永言『語文學論集（增訂版）』語文出版社、一九九九年）參照。同論文によれば、後漢の王延壽「夢賦」を早期の用例とする。

(42) 盩厔縣尉の職掌については、拙稿「『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（六）」（『中國詩文論叢』第十二集、一九九三年）の一七五番參照。

(43) 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）「仙遊寺」の條參照。

(44) 「「長恨歌」の主題について—「恨」の主體と作者の意圖—」（『白居易研究年報』創刊號、勉誠出版、二〇〇〇年）。

(45) 前野直彬編『唐詩鑑賞辭典』（東京堂出版、一九七〇年）所收。

(46) 張國剛『唐代官制』（三秦出版社、一九八七年）參照。

(47) この説は「長恨歌」およびそれを物語化した陳鴻「長恨歌傳」のなかに、七夕傳説を踏まえた表現・描寫があることによって、十分首肯できる。

(48) 『吉川幸次郎全集』（筑摩書房、一九七四年）第十巻所收の「新唐詩選續篇前篇」による。

(49) 主に國田百合子編『長恨歌・琵琶行抄』（武藏野書店、一九七六年）所收の內閣文庫所藏『長恨歌・琵琶行和解』に據りつつ、同書に收める他の二種をも參照し、表記や文字を若干改めた。

(50) 明治書院、一九七六年。

(51) 文研出版、刊行年月未詳。

(52) 白詩「睡覺」にも、類似の表現「星河耿耿漏綿綿、月暗燈微欲曙天」が見られる。

(53) 陝西人民出版社、一九九七年、二六六頁。

(54) 大修館書店、一九九七年。

(55) 『白居易研究年報』第二號（勉誠出版、二〇〇一年）所收の今井清「白氏文集の會讀について」による。